

発達障害児に対する保育所等訪問支援の効果

ー現場保育士に対するアンケート調査ー

○北野 和子, 太田 篤志

(株式会社アニマシオン プレイジム)

I.はじめに

近年、様々な発達支援ニーズを持った子どもが増え、保育の現場では、集団保育に難しさを感じている保育士が増えてきている。このような状況を解決する目的で、発達障害に関する研修会の機会も増え、保育士の意識も高まってきているが、現場の問題を解決する実践力を身に付けることは難しいとの声もきかれる。このようななか保育等訪問支援事業が注目されてきている。この事業は、実際の保育現場の中で保育・教育の専門家が療育の専門家から体験的に学ぶことができる場であり、この事業を通して地域での療育力を高めることができると私たちは考えている。

II.研究の目的

保育所等訪問支援をより効果的に実施するために、実際の支援で現場の保育士は、何を感じ、何を学んだのかを調査し、どのような支援内容が有効であるかを検討する。本研究により、発達障害児に対する地域支援システムの検討や効果的な訪問支援の在り方を明らかにできることが期待できる。

III.方法

1) 対象・調査方法

当事業所が実施している保育所等訪問支援を受け入れている保育所、こども園、幼稚園の担任（保育士、保育教諭、幼稚園教諭）10名、管理職である所長・園長及び主任9名、合計19名に対してアンケート用紙を配布し回答を依頼した。なお事前に利用児の保護者及び関係機関に対して文書及び口頭にて研究の説明を行い研究協力の同意を得た。

アンケートの内容は、保育士の悩み、訪問支援による子どもや自分自身の変化、訪問支援の効果、満足度などに関してリッカート尺度及び自由記載にて回答するものである。分析は、リッカート尺度については量的分析、

自由記載については KJ 法を参考に質的分析を行った。

2) 当事業所の支援の内容

当事業所では、平成28年4月より保育所等訪問支援事業を開始し、言語聴覚士及び保育士（特別支援教育士）の2名が、保育園、幼稚園、小学校、中学校に訪問している。現在、月平均訪問件数は44件、利用児一人当たりの月平均訪問件数は、2.3回である。

IV.結果

リッカート尺度については各回答の割合をパーセンテージで、自由記載内容については KJ 法を用いて図解化した後、カテゴリを文章化したものの一部を示す。なお【 】は大カテゴリ、[] は中カテゴリを意味する。

1. 子どものどのようなことに悩んでいるのか

自由記載の内容をカテゴリ分析した結果、担任からの意見は【集団活動になじめない】【人とのかわり方がわからない】【身辺自立の定着ができない】【子どもの思いがわからない】、管理職からの意見は【その子に合った適切な支援方法がわからない】【支援方法に自信がない】に分類され、担任の広範囲におよぶ悩みに対して管理職として自信をもって指示できない姿が見いだされた。

2. 訪問支援による子どもの変化

訪問支援によって子どもの姿に変化があったかとの問いに対しては、「非常に変化した」58%、「やや変化した」21%。「変化なし」0%であった。

自由記載の内容をカテゴリ分析した結果、担任からの意見は、【友達とうまく遊べるようになった】【自分で判断し行動できるようになった】【遊び・生活力がついた】【安心して過ごせるようになった】【周囲の子どもへのネガティブな影響】、管理職からの意見は【集団や友だちを意識し関わるようになった】【やるべ

きこと・伝え方がわかり自分でできることが増えた】【原因を捉え肯定的な関わり方で子どもが変わった】【改善がみられなかった】に分類された。両者ともに子どもの自律性が高まったことや集団活動へ参加する力の向上が示された。【自分で判断し行動できるようになった】【やるべきこと・伝え方がわかり自分でできることが増えた】に強く影響を及ぼした中カテゴリは〔視覚的構造化の支援によって一人で出来ることが増えた〕〔カードを用いて思いを伝えられるようになった〕等であり、いわゆる視覚的コミュニケーション、スケジュール提示などによるものであった。一方、あまり改善のみられない事例や、支援に入ることでは他児が落ち着かなくなることなどの意見もあった。

3. 保育士自身に生じた変化

訪問支援によって保育士自身の保育に変化があったかとの問いに対しては、「非常に変化した」42%、「やや変化した」21%。「変化なし」0%であった。

自由記載の内容をカテゴリ分析した結果、担任からの意見は【目の前の子どもに合わせてオーダーメイドの支援ができるようになった】【自信につながる振り返りができるようになった】【気持ちがプラスになった】、管理職からの意見は【具体的な対応ができるようになった】【自分で考えられるようになった】【担任の保育力が向上した】【子どものことを管理職と一緒に考えられる】【保育にゆとりができた】に分類された。担任は、訪問支援員が実施した〔その子に合った支援を見聞きできた〕経験によって〔自分の中で支援方法を生み出せるようになった〕ことで、オーダーメイドの支援ができるようになったと思われる。その結果、前向きな気持ちで自分の実践を振り返ることができ、担任の自身につながっているようである。そして管理者もこのような担任の変化を感じている。

4. 支援目標の達成度

訪問支援事業所にて作成した支援目標を訪問支援員がどの程度達成できたと思うかという問いに対しては、81~100%達成との回答が一番多く、全体の47%であった。61%~80%達成と回答した者は、全体の32%、41%

~60%達成と回答した者は、全体の11%であった。

5. 訪問支援に対する満足度

訪問支援にどの程度満足したかという問いに対しては、81~100%満足との回答が一番多く、全体の63%であった。また61%~80%達成と回答した者は26%であった。

6. 訪問支援への要望

今後、訪問支援に何を望むかとの質問に対しての自由記載の内容をカテゴリ分析した結果、担任からの意見は、【根っこがわかる支援】【保育に新しい風を入れる】【現場の実情に合わせた支援】、管理職からは【園全体で学びたい】【具体的な方法を学びたい】【保護者の対応にも参加して欲しい】【訪問支援方法を改善してほしい】に分類された。【根っこがわかる支援】には、〔私たちを助けて〕という思いだけではなく〔適切な把握〕をもとに〔どうしたら子どもを伸ばせるのか〕という担任の真摯に向き合う姿勢が含まれていた。しかし現実には、訪問支援員と語り合う〔時間がとれない〕という悩みもあった。管理職も同様に〔具体的な方法〕を学びたいと考えていたが〔間接支援の時間が取りにくい〕〔保育の雰囲気や流れが変わらないようにして欲しい〕と訪問支援のやり方の改善の必要性も感じていた。

V. 考察

今回のアンケート結果より、訪問支援によって、対象の子どものみならず現場の保育士にも大きな影響を与える可能性が示唆された。現場の保育士の学びは、自分の現場で展開される訪問支援員による実際の支援を見聞きすることによって深められていったと考えられた。そして問題の原因をともに考え、問題解決のプロセスを共有するなかで、支援に対する前向きな姿勢やポジティブな思考、支援への自信につながっていくと考えられ、共に汗を流すことの大切さが再確認された。一方、保育の流れを邪魔しないように訪問支援員が溶け込んでいく直接支援の難しさや、多忙な保育園業務のなかでじっくりと話し合う時間の確保など間接支援の難しさを解決できる訪問支援の在り方について検討する必要がある。
キーワード：保育所等訪問支援，訪問支援の効果，地域療育